

移民都市アムステルダムの生成

千葉大学法経学部教授 水島治郎

アムステルダムを訪れたある外国人観光客が、地元の人に道を聞いた。

「アンネ・フランクの家はどちらですか？」

「ああ、あちらですよ」

「それはどうも」

お礼を言って、示された方向に行こうとする外国人観光客。

すると先ほどの地元っ子、観光客を呼びとめていわく、

「でも、アンネはいまそこにはいませんけど」

プロローグ

アムステルダムっ子はジョークが好きだ。しかもよそ者に向かって真剣な顔をして重々しく言うものだから、よそ者は一瞬まじめに考え込む。そして次の瞬間、そのよそ者はいっぱい担がれていることに気づき、アムステルダムっ子と顔を見合わせて二人で爆笑する。こうしてアムステルダムを訪れる者は、この都市の手ごわさと優しさを同時に肌で感じることになる。

さて、上記の他愛もないアムステルダムらしいジョークには、何人かの人物が登場する。一人はもちろん旅行者。もう一人はアムスっ子。上記のジョークが英語でなされていることからすれば、この旅行者は外国人だろう。アムステルダム中央駅から徒歩でアンネ・フランク・ハウスに向かう外国人観光客は多いだろうが、若干の距離があり、水路に沿って微妙に道も曲がっていることから、簡単にたどりつけない人もいる。上記のようなジョークが、毎日のように交わされているのかもしれない。

しかし、ここに登場人物はもう1名いる。それは、アンネ・フランクである。彼女はアムスっ子が指摘するように、「不在」である。しかしその「不在」こそが、何百万人もの人を国内から彼女のもといた住みかへと引きつけ続けてきた。彼女が、もはやアムステルダムに二度と戻ってこない人物だからこそ、彼女はアムステルダムを代表する歴史上の偉人となったのだ。彼女の存在、いや不在を通して、外国人旅行者とアムスっ子は出会い、言葉を交わし、爆笑して別れを告げる。彼女の「不在」によって、どれだけ多くの出会いがなされたことだろうか。

アンネ・フランク自身が、世界で最もよく知られるアムステルダムっ子であることは、いうまでもない。彼女はアムステルダムの学校に通い、アムステルダムを愛した子どもであった。そう考えれば、このジョークには、アムステルダムっ子が二人、そして外国人が一人登場する、と言えるだろう。

しかし、それだけで話が済むだろうか。アンネ・フランクの一家は、確かにアムステルダムに居を構えていたとはいえ、元をただせば、アンネが小さい頃、ナチ・ドイツを逃れてドイツからオランダに移ってきた移民でもあった。彼女たちが新たな場所としてアムステルダムを選んだのは、偶然ではない。アムステルダムは16世紀以来、ヨーロッパ各地で迫害を受けた多数のユダヤ人が、最後にたどりついた安住の地として知られている。またユダヤ人に限らず多数の外国人が移り住み、活躍の場を得てきた国際色豊かな都市でもあった。そもそも都市経済そのものが、移民によって支えられてきた歴史を持つのである。

「移民都市」アムステルダム。移民であってもアムステルダムに根づけば、立派なアムステルダムっ子である。アンネ・フランクも移民であって、同時にアムステルダムっ子だった。そう考えると、先のジョークに登場する人物は、正確に言えば、アムステルダムっ子が二人、そして外国出身者が二人、ということになるだろうか。別の言い方をすれば、「移民にしてアムステルダムっ子」であるアンネ・フランクこそが、外国人とアムステルダムっ子の出会いを媒介した、と言えるのかもしれない。

本稿では、このような「移民都市」アムステルダムの歴史を振り返る。現在、アムステルダムは、移民指標を重視する手法で測れば、世界第三位の「グローバル都市」として位置づけられるという(Neil and Rath, 2009, 12)。近年、移民に対する批判がオランダのみならずヨーロ

ッパ各国で厳しさを増しているが、移民を多数受け入れてきた長い歴史をもつアムステルダムの過去（具体的にはオランダ共和国期）を具体的に検討することは、移民をめぐる建設的な議論のための有効な視座を提供するものとなる。17世紀以来のアムステルダムがなぜ「移民都市」となったのか、そしてその経済社会において移民の果たした役割と意義は何か、といった問題を解明することで、現代の移民と都市、グローバル化をめぐる議論に貢献したいと考えている。

1 オランダ共和国と移民

アムステルダムについて検討するまえに、まずオランダ全体と移民のかかわりについてみておきたい。そもそも共和国期のオランダは、移民を多数受け入れるとともに、移民によってその経済を支えられた国だった。約200年続いた共和国期を通算すると、移民の数は総計で180万人に達するという推計がある。その多くは労働者として移住した外国人であるが、オランダ共和国の人口が2世紀を通して平均200万人だったとすれば、当時のオランダの労働力人口のおよそ3分の2が移民労働者だったのではないかという(Obdeijn and Schrover, 2008, 31)。

なぜそれほど多くの移民がオランダに流入したのか。最大の理由は、オランダにおける経済発展である。共和国期のオランダでは、17世紀の「黄金の世紀」を頂点として、ヨーロッパでも最も競争力ある商業・工業・農業セクターが発展したが、これらはいずれも多数の労働力を必要とした。国内の少ない人口ではこの労働力需要を賄うことは不可能であり、その結果、ヨーロッパ各国から多数の労働者が流入することとなった。特にオランダでは都市の発展が著しく、高度に都市化された国となっていたが、概して近世ヨーロッパの都市は衛生状態が悪く、死亡率が高かったことから、たえず外部から都市への人口の流入を必要としていた。また農村でも、農業のほか煉瓦焼きなどの農村工業を含めて季節労働者に対する需要が強く、比較的短い期間滞在する者も含め、多くの外国人労働者がオランダの西部・北部の沿岸地方に流入した。

またオランダが東インド会社を有し、海洋国家としても発展したことも、外国人労働力への需要を高める結果となった。危険の多い航海には、報酬目当てで外国人の乗組員が多数乗船した。商業船舶の乗組員の約半数、共和国期を通算して約50万人の乗組員が外国人だったとみられている。海軍でも4-7割、捕鯨船では65%が外国人だった。ドイツやスカンディナヴィア諸国出身者が多数を占めたが、東インド会社がアジア人乗組員を採用したことで、18世紀末には、アムステルダムで中国人や東インド出身者の乗組員の姿がみられるようになっていたという。

オランダ共和国の軍事力も、外国人に強く依存していた。共和国時代の兵力は通算して約200万人いたと見積られるが、そのうち約半数は外国人だった。ドイツやスイス、スコットランドなどから、場合によっては部隊ごと雇われてオランダ軍に勤務したのである。1810年以降、オランダで徴兵制が敷かれて外国人兵士の必要性が基本的になくなっていった後も、東インド植民地では外国人兵士に大幅に依存していた(Lucassen and Lucassen, 2011)。

これらの労働力需要の強さを反映し、オランダにおける賃金水準は他のヨーロッパ諸国と比べて明らかに高水準であり、周辺諸国はもちろん、比較的遠い国からも移民労働者を引き付ける結果となった。

オランダ共和国に移民が集まったもう一つの理由は、オランダにおける政治的・宗教的寛容の存在である。独立戦争期には南部ネーデルラントからカルヴァン派信徒、そしてそれ以降もフランスのユグノーなど、ヨーロッパ各地からプロテスタントの信徒がオランダに流入したが、カルヴァン派を公定宗教としつつ、それ以外の宗教・宗派への積極的な迫害をしなかったオランダには、多様な宗教・宗派の人々が流れ込んでいる。宗教的寛容度としては、当時のオランダに匹敵するのはヴェネツィア共和国ぐらいであったという。なおこれらの政治的・宗教的理由による移民は、共和国期を総計して約15万人といわれている。

このように、共和国期のオランダは、「たえざる大量移民の国(een land van voortdurende massa-immigratie)」だったのである(Lucassen and Lucassen, 2011, 202)。

2 都市アムステルダムと移民：南部ネーデルラント出身の移民

オランダの中でも、特に移民が集中して住み、移民の流入そのものが都市の繁栄を支えた都市として、アムステルダムをあげることができる。1585年に人口が3万人に過ぎなかったアムステルダムは、40年もたたない1622年には人口が108,500人へと急増したが、その増加分の多くが移民だった。桜田美津夫が述べるように、アムステルダムにはプロテスタントのほか、再洗礼派、カトリック、ドイツのルター派商人、イングランドのピューリタンなど、様々な人々が集まって膨張していた(桜田、1999、22)。こうした多数の移民の流入と定住を通じて、アムステルダムは「コスモポリタン都市」へと変貌していくことになる。

特にアムステルダムの場合、この時期南部ネーデルラントから亡命してきた移民の果たした役割はきわめて大きい。オランダ独立戦争の過程で、スペインの猛攻によってスペイン側に奪還された南部ネーデルラントからは、プロテスタントの都市市民をはじめとして、北部へと脱出する動きが相次いで生じており、その数はおよそ10万人と推計される。そして上記の期間におけるアムステルダムの人口増加のうち、南部ネーデルラント出身者は約3万5000人にのぼるとみられている。

1585年に陥落した南部の最大の商業都市アントウェルペンからは、多数の商工業者たちが財産を持って脱出し、アムステルダムに移り住む例が多かった。彼らの移住の背景には、宗教上の理由に加えて、北部側がスヘルデ河口を海上封鎖したために、アントウェルペンが国際貿易港として利用が困難になったという経済上の理由もあった。有力な商人たちはアムステルダムに落ち着くと、ヨーロッパ大に広がる商業ネットワークを利用して国際商業に従事し、アントウェルペンに代わってアムステルダムを国際商業の中心に押し上げた。また彼らは東インド会社に多額の投資を行うなど、アムステルダムを中心とする北部ネーデルラント＝オランダ共和国の経済発展に多大な貢献をした。東インド会社の大口株主のなかで、北部出身者は43名であったのに対し、南部出身者は41名におよび、しかも株式の保有額は平均すれば南部出身者の方が多かったという(Obdeijn and Schrover, 2008, 34)。そもそも1602年の東インド会社の設立自体、南部出身の大商人の資産の有効活用を図る狙いもあったと指摘されている(佐藤、2012、78)。

また南部諸都市から北部へは、ダイヤモンド、皮革、tapijt、ガラス、陶器、出版などの産業に従事する業者、職人たちも移動した。ライデンには、人口の6割を占めるほど多数の南部出身者が流入し、彼らのもたらした技術によって、17世紀にはヨーロッパ最大の毛織物工業都市に成長し、ライデン産の毛織物は全ヨーロッパに輸出された(皮肉なことに、毛織物生産の原料に用いられたのは、南部ネーデルラントを武力制圧し、オランダと戦争状態にあったスペインのメリノ羊毛であった)。またハールレムでは、やはり南部出身の職人たちによって亜麻織物漂泊業がもたらされ、漂白された製品はテーブルクロスやナプキンの材料、レース編みの糸として重宝された(佐藤、2012、73-74)。南部出身の芸術家も多く、ハールレムにはフランス・ハルスが定住した。

北部経済が発展し、労働力が不足する中で、南部出身の労働者は重宝がられ、オランダの経済の中心であったアムステルダムを含むホラント州とゼーラント州は、さまざまな優遇措置を講じて彼らをひきつけた。なおこうして北部に移住した南部ネーデルラント出身者の中には、カトリック信徒も少なからず含まれていた。この時期の南部ネーデルラント出身から北部への大量の移動は、宗教上の理由と経済上の理由の二つの理由があいまって生じたものだといえるだろう。

3 ユグノーの流入

さらに17世紀末になると、フランスから多数のユグノーがオランダに亡命し、その多くがアムステルダムに流入した。17世紀のフランスではプロテスタント迫害が次第に強まり、1685年にはルイ14世によってナントの勅令が廃止されたため、フランスから20万人ものプロテスタント信徒が国外に脱出したが、そのうち4-5万人程度がオランダに向かったとみられている(Obdeijn and Schrover, 2008)。

もともとオランダには、フランス語系の南部ネーデルラント出身者のプロテスタントからなるワロン教会が各地に存在し、言語・宗派を同じくするフランスのユグノーにさまざまな支援

を行っていたことから、亡命してきたユグノーにも積極的に受け入れの手を差し伸べた（なおイタリアの少数派プロテスタントであるワールド派の亡命者を 17 世紀半ばにオランダで受け入れたのも、ワロン教会である）。

しかし彼らがオランダで受け入れられたのは、単なる宗教的な理由だけではない。商工業に従事する割合の高いユグノーに対しては、アムステルダムをはじめとするオランダの諸都市は歓迎の姿勢を示し、市民権の付与、課税の免除、営業許可の付与などさまざまな特権を提示して誘致を図った。デルフト、ライデン、フローニンゲンなどもユグノーの移入を積極的に進めたが、やはりアムステルダムがユグノーを引きつけることに最も成功した。ユグノーは商工業の様々な分野に進出したが、文化面での貢献も著しい。オランダにおけるフランス文化への憧れを背景に、ユグノーたちはフランス語教師としてフランス語をオランダの市民層に教えるなど、フランス文化の伝播者となった。また 17 世紀末から 18 世紀初頭にかけてアムステルダムに存在した 230 軒の出版社・本屋のうち、ユグノー系のものは 80 軒に達し、フランス語の書籍も多数出版されたのである。

なおオランダにおける亡命ユグノーの代表的人物として国際的に知られた思想家ピエール・ペールは、ロッテルダムに住んで著作活動を展開し、寛容の重要性を訴えた。

4 アムステルダムとユダヤ人

アムステルダムが受け入れた移民は、もちろんプロテスタントに限られない。キリスト教徒でもないユダヤ人も、アムステルダムでは迫害を免れることができた。アンネ・フランクの一家がアムステルダムに移住したのは 1930 年代のことだが、それまでアムステルダムには、ユダヤ人をヨーロッパ各地から受け入れてきた 350 年の歴史があった。

ユダヤ人たちのアムステルダムへの流入の背景にも、宗教的な理由と経済的な理由の二つがあいまって存在した。16 世紀末以降、イベリア半島、特にポルトガル出身のユダヤ人が多数アムステルダムに移住する。いわゆるセファルディムである。

イベリア半島では、15 世紀末にレコンキスタをなしとげたスペインにおいて、まずユダヤ人迫害が進められた。彼らはカトリックへの改宗か出国かのいずれかを厳しく迫られ、カトリックに改宗した者たちにも厳しい監視の目が注がれた。そこで多くのユダヤ人が、相対的に抑圧の緩い隣国のポルトガルに移ったが、1580 年にポルトガルがスペインに併合され、スペイン流の厳しい異端審問がポルトガルにも導入されると、カトリックに名目的に回収していたユダヤ人（「新キリスト教徒」と呼ばれていた）がポルトガルに住むことが困難となっていく。彼らの多くは脱出を始め、オランダ、とりわけアムステルダムに安住の地を求めた。オランダ独立戦争の休戦期（1609 年－1621 年）には、イベリア半島からさらなるユダヤ人の流入が生じたほか、一旦アントウェルペンやハンブルクに滞在していたポルトガル系ユダヤ人もアムステルダムに移っていく。そしてアムステルダム到着以後、彼らはカトリック信仰を脱ぎすて、数世代前の先祖の信仰していたユダヤ教に「戻る」ことになる。

彼らが特にアムステルダムを選んだのはなぜか。桜田美津夫が指摘するように、ロッテルダムやハーレルム、アルクマールなどのように、アムステルダムよりユダヤ人に対して好条件を提示していた都市もあった。たとえばアルクマールは、ユダヤ人たちの信仰を全面的に保障し、（当初はアムステルダムで認められなかった）専用の墓地を持つことを認めていた。しかしそれにもかかわらず、多くのユダヤ人はアムステルダムに住むことを選択した。商業活動上「アムステルダムの持つ利便性」が、他の都市を上回ったからである（桜田、1999、21）。1700 年の時点でみれば、オランダ共和国に住むユダヤ人の合計 8400 人のうち、約 4 分の 3 に当たる 6200 人がアムステルダムに住んでいたという。

アムステルダムに定住したユダヤ人は、当地で商工業に積極的に従事し、都市経済になくはならぬ存在となっていく。ポルトガル系ユダヤ人商人は、イベリア半島のほか、フィレンツェ、ハンブルク、アントウェルペンなどに広がるネットワークを持ち、ポルトガルとの交易では小麦・ライ麦、織物、イングランド産の魚、スカンディナヴィア産の木材などを輸出し、ワイン、オリーブ油、砂糖、ダイヤモンドなどを輸入した（桜田、1999、28）。なおそのネットワークは新大陸にもひろがった。ポルトガルが領有し、一時オランダもその北部を領有し

たブラジルでは、オランダ系のポルトガル系ユダヤ人が砂糖取引などで活躍した。ただアムステルダムでも、ユダヤ人の加入を認めたギルドはごく一部にとどまり、ギルドの組織されていない産業に従事することが多かった。



アムステルダムのポルトガル系ユダヤ人によって建設されたシナゴーク

他方、17世紀半ば以降になると、アムステルダムに新たにユダヤ人が多数流入する。三十年戦争による混乱を避けてドイツから流入したユダヤ人をはじめとして、ポーランド、リトアニアなど東ヨーロッパ諸国からユダヤ人がセファルディムを頼り、アムステルダムに移ってきたのである。アシュケナジムと呼ばれた彼らは、セファルディムと異なり貧しい者が多く、言語も異なっていた。アムステルダムのセファルディム人口が約 3000 人でほぼ一定していたところ、アシュケナジムは 1650 年には 1000 人、1700 年には 3200 人、そして 1750 年には 14000 人と着実に増加し、セファルディムを数では圧倒した(Obdeijn and Schrover, 2008, 47)。当初はセファルディムもアシュケナジムを受け入れていたが、後には別個の共同体を作ることとなり、その状態は 19 世紀初頭に両組織の合同が政府によって強制されるまで続いた。

5 ドイツ出身者をはじめとする移民労働者

以上で概観した南部ネーデルラント出身者、ユグノー、ユダヤ人の移民については、富と技術、文化、国際的ネットワークをオランダにもたらし、都市アムステルダムの繁栄を支えた存在として光が当てられることが多い。しかし他方、これらエリート層の移民とは別に、共和国期のオランダにはそれをはるかにしのぐ数の労働者が流入している。先に述べたように、オランダでは都市と農村の双方において旺盛な労働力需要が存在し、賃金水準の高さもあって多くの労働者がドイツや、デンマーク・スウェーデンなどの北欧諸国から流入した。これらの移民労働者の多くは、未婚の若い労働者が中心だった(Kuijpers, 2005, 17)。近年、こうした名もなき移民についての研究が、オランダでは積極的に進められている。

特にめだつのは、ドイツからの移民である。三十年戦争期に多くの労働者がドイツから流入したが、それ以降もドイツからの人の流れは続いている。共和国期を通じ、アムステルダムの住民全体では約 2 割がドイツ系だったと推計されている(他方、ライデンではフランスや南部

ネーデルラント出身者が多かった)。ドイツ人労働者は特定の産業に集中する傾向が強く、仕立て職人、園丁 *tuinlieden*、パン職人、御者 *koetsier*、行商人などにドイツ出身者が多い。彼らはギルドに入ることを認められ、職業生活を通してアムステルダムの経済社会への積極的参加を果たしていった。17世紀のアムステルダムでは、パン職人の半数をドイツ出身者が占めていた(Obdeijn and Schrover, 2008, 59)。

ドイツからの移民は、オランダのルター派教会に属することで、オランダで生活するためのネットワークに入ることができた。そもそも移民の多くは、住居・仕事・結婚・福祉といった人生の様々な局面で、移民の持つネットワークに頼っていたのであり、このネットワークはソーシャル・キャピタル(社会関係資本)としての役割を果たしていた(Kuijpers, 2005, 28)。カルヴァン派教会が公定教会とされたオランダでは、ルター派教会は非公認教会として日陰者の地位に甘んじなければならなかったが、多数のルター派信徒のドイツ出身者を迎えて独自のコミュニティとして発展した。教会ではドイツ語の説教がなされ、ドイツ出身者の交流の場として機能し、自前の福祉機能(貧困者救済、孤児院運営など)もあり、まさに典型的な「移民教会 *immigrantenkerk*」となったのである(Lucassen and Lucassen, 2011, 204)。特に移民女性にとっては、家事労働者として仕事を探す上で、教会の有するネットワーク機能が重要な役割を果たしたという。ただ世代を経るに従って、ルター派教会からオランダ社会の主流派教会であるカルヴァン派教会に移籍する信徒も多く、アムステルダムにおいてドイツ系住民の存在感が大きかったことに比べると、ルター派教会の規模は小規模にとどまった。

おわりに

以上のように共和国期のオランダには、経済的・宗教的理由を主な背景として多数の移民が流入し、定着した。特にアムステルダムには、国際商人から名もない労働者に至るまで移民が流入し、資本・知識・技術・労働力などをアムステルダムにもたらし、アムステルダムをヨーロッパを代表する国際経済の中心におしあげた。

とはいえ、移民の流入にはさまざまな影もつきまとう。オランダには男性のみならず女性の流入も多かったが、女性人口が男性人口を上回っていたオランダでは外国人女性が仕事にありつくことは容易ではなく、売春婦に身をやつす者もいた。17世紀後半のアムステルダムでは、売春婦の3割近くが外国出身者だったという(Obdeijn and Schrover, 2008, 59)。

いずれにせよ、「移民都市」アムステルダムは、まさにこのオランダ共和国期に生成した。今もなお多くの移民・外国人をひきつけ、国際的な経済活動・文化活動における中心的な地位を保ち続けているアムステルダムのあり方を考えるときに、この共和国期のアムステルダムの発展を忘れることはできない。

いまなお「不在」であるアンネ・フランクは、今日もまた多くの外国人の訪問者とアムステルダムっ子との出会いを演出していることだろう。「移民にしてアムステルダムっ子」である彼女こそは、アムステルダムというドラマチックな舞台における、数ある主役たちの一人であったのである。

引用文献

Kuijpers, Erika, 2005, *Migrantenstad: Immigratie en sociale verhoudingen in 17e-eeuws Amsterdam*, Hilversum: Verloren.

Lucassen, Leo and Jan Lucassen, 2011, *Winnaars en verliezers: Een nuchter balans van vijfhonderd jaar immigratie*, Amsterdam: Bert Bakker.

Neil, Liza and Jan Rath, 2009, "Am I Amsterdam? Immigrant Integration and Urban Change," in in Liza Neil and Jan Rath eds., *Ethnic Amsterdam: Immigrants and Urban Change in the Twentieth Century*, Amsterdam: Amsterdam University Press, pp.11-22.

Obdeijn, Herman and Marlou Schrover, 2008, *Komen en gaan: Immigratie en emigratie in Nederland vanaf 1550*, Amsterdam: Bert Bakker.

桜田美津夫、1999、「オランダ共和国のユダヤ人—アムステルダムのセファルディムを中心に—」『史観』140号、17-31ページ。

佐藤弘幸、2012、『図説 オランダの歴史』河出書房新社。